

<前回> 生命倫理とキリスト教

(1) 現代の生命論と神学—問題状況—

1. 現代の問題状況：1960年代・70年代、生命倫理の発生 → 問いとしての生命
2. 自由原理（倫理的な自由主義） cf. 環境倫理：平等原理
3. 1980年代後半、あるいは1990年代以降の変化

(2) クローン技術とキリスト教

Ted Peters, *Science, Theology and Ethics*, Ashgate 2003

1. 適切な問いを立てることの意義！
何が神学的な問いか、キリスト教思想独自の貢献とは？
2. 出発点としては適当でも、充分ではない論点
 - ・ 遺伝子情報とプライバシー保護 → 就職、社会保険
遺伝子差別という問題
差別なしの情報
 - ・ 自己同一性・魂の危機？
関係概念としての尊厳（尊厳は遺伝子といった実体的要素の問題ではない）
子供の尊厳性の危機、製品・商品としての子供
 - ・ 「自然」という問題 → 自然と文化の二分法の問題
自然は善か（自然の状態を変更することは悪か）
「である」から「べき」を論じる
遺伝子神話
双子問題（アウグスティヌス『神の国』）
3. キリスト教思想の問いとして
 - ・ 原罪論、自然が直ちに善ではない
 - ・ 神の愛は遺伝的な構造に左右されるものではない
 - ・ 創造論、神の継続的創造行為は、自然における進化のプロセスを通してのみならず、人間の文化的な創造行為を通して働く。
被造的な共同創造者(a created co-creator)としての人間。
4. いくつかの帰結
 - ・ クローニング自体が非倫理的ではない
 - ・ 再生医療のもたらす恩恵は多大である。全面的禁止ではなく、一時的な凍結。

9. 環境倫理とキリスト教**1 キリスト教思想の基礎—相関の方法—**

1. 思想（宗教思想・キリスト教思想）に対して、いかにアプローチするのか。それについては、思想の基本構造に留意する必要がある。

「相関の方法」（Paul Tillich, *Method of Correlation*）を参照し、一般化する。

- ・ 思想の成立する場：状況と伝統の相関、状況と伝統の両極構造

状況 → 宗教的問いを定式化する（哲学的作業）

キリスト教思想の現代的意義（適応性）

伝統（メッセージ） → 「問い」に対する答えという観点から、

神学思想を構築する（解釈する）。

キリスト教のアイデンティティ

- ・ 相関の多様な形態（緊密な結合から緩やかな対応まで）
 - ・ 状況への不適応と過剰な適応という危機
4. キリスト教思想を理解するには、それが答えようとしている問いに注目しなければならない。
5. 参考文献
- ・ ティリッヒ 『組織神学』全三巻、新教出版社
 - ・ 芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社

2 キリスト教思想から見た現代

6. 現代の状況において、キリスト教思想として注目すべき問いは何か。
答えよりも、むしろ問いの定式化にこそ留意しなければならない。
7. マクフェイグ
- 「今日、キリスト教神学を遂行する視点」「新しい感性が要求されている」
「すべて生あるものが本来相互に依存し合っていること」「全体論的、進化論的、生態学的なヴィジョン」、「地球の運命に対する人間の責任性」「核のホロコースト」、「隠喩やモデルで思考すること」

↓

現代においてキリスト教が考慮すべき状況としての環境危機

8. 参考文献
- ・ Sallie Mc Fague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress 1987
 - ・ 芦名定道「現代思想とキリスト論」水垣渉・小高毅編 『キリスト論論争史』日本キリスト教団出版局、529-567 頁。

3 環境思想とキリスト教思想

9. 環境倫理の諸問題：平等の原理、全体性の立場 cf. 生命倫理
自由と平等の両義性！
10. 自然の生存権／世代間倫理／地球全体主義：不平等の三つの形態
11. 聖書は人間中心主義か？ 聖書の創造論の環境破壊に対する責任と関与？
↓
リン・ホワイトの問題提起と創造論を中心とした論争（1970-80 年代）
12. 「地の支配」モデル（創世記 1 章）
13. 「地の支配」とは？
14. 「地の僕」モデル（創世記 2 章）
耕す＝仕える・奉仕する → 大地にへ奉仕する人間
農民として人間
土から生まれ、大地に仕え、土に帰る。
cf. 女神としての神、母なる大地ガイヤ
15. その後あるいは今後の論争（1990 年代以降）、終末論へ
16. ヨハネ黙示録（21 章）と環境
黙示文学は反環境的か？
21:1 わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、

もはや海もなくなった。2 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。3 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、4 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

17. 「もはや海もなくなった」

ケラー：海＝太古のカオス、神話的表象 → 自然神・女神

ロッシング：海＝ローマ帝国の経済的政治的支配、社会政治的表象

cf. ディープ・エコロジーと社会的エコロジー

ブクチン『エコロジーと社会』白水社。

18. 共生のヴィジョンとしての終末論

モデルはヴィジョンによってイメージ化され、感性に作用する（感動を生み出す）。

イザヤ 11 章

6 狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。

19. 参考文献

・ 芦名定道 『自然神学再考——近代世界とキリスト教』 晃洋書房

・ Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press 2000.

Theodore Hiebert, "The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions." (pp.135-154)

Catherin Keller, "No More Sea: The Lost Chaos of the Eschaton." (pp.183-203)

Barbara R. Rossing, "River of Life in God's New Jerusalem: An Eschatological Vision for Earth's Future." (pp.205-224)

・ 加茂直樹・谷本光男編『環境思想を学ぶ人のために』世界思想社。

4 宗教思想の意義

20. 希望のネットワーク（希望の組織化）の必要性：絶望を超えて進むために。

ビジョンを描くこと、ネットワークづくり、真実を語ること、学ぶこと、愛すること

21. 環境危機へ対処するには、何が必要か。

新しい科学技術。しかし、これで十分か？

22. 人間は何によって動くのか？ 人間を理屈で説得することの限界（もちろん、理屈はきわめて大切であるが）。「環境に優しく」ということの大切さは理屈で分かっているが、実践につながらないという現実。

23. 感性の欠如

24. 宗教的ヴィジョンは、理屈だけでなく、感性に訴える。

哲学的倫理的な環境理論では動かない人間たちを、動かす可能性

宗教的象徴の媒介機能とその多チャンネル性

26. 参考文献

- ・ドネラ・H・メドウズ他 『限界を超えて』ダイヤモンド社
- ・高木仁三郎 『市民科学者として生きる』岩波新書

<レポート課題>

- ・成績はレポート評価による。
- ・課題：授業で紹介した文献を手掛かりに、「近現代キリスト教思想の諸問題」から、テーマを設定し、議論せよ。
- ・字数と形式：2,000字以上程度。使用用紙の形態（サイズ、縦横など）は自由。
ワープロ・手書きいずれも可能。
- ・締め切り・提出場所：掲示板（教務掛）の指示の通り。